■書　評

マクロ神経病理学アトラス

新井信隆　著
医学書院
2019年7月　152頁
本体価格　9,000＋税

剖検脳(限局性皮質異形成のみは外科手術組織)の正常構造と病変（出血・梗塞・脳萎縮・代謝異常など）の肉眼病理所見を明示した画期的な図譜であり類書はない．本書の帯には「病理学，法医学，神経内科学などを専攻するドクターは読んでおきたい1冊」とあり，残念ながら精神医学への言及はない．しかし，認知症や脳器質性疾患を診療する精神科病院の図書室に備えておくべき書籍と考え，書評欄で紹介する．

剖検脳の肉眼病変の検索過程（通常は「脳の切り出し」と呼ぶ）では，大脳ではまず中心前回を同定する作業を行う．これは必ずしも容易ではない．評者はかつて脳の肉眼的観察に際しては脳の正常肉眼解剖図譜を机上に置いて参照しながら中心前回や頭頂葉の各脳回を同定し，各脳回の萎縮などの病変を評価していた．本書では，「中心前回を同定できますか？　下図を見ながら繰り返し学習してください．」という訓練が付随しており，繰り返し確認することができる．

さて，精神科臨床医にとって，代表的な脳器質疾患の典型的症例で病変分布を把握すること，および病初期から末期病変までの継時的な変化を把握し臨床症状と合わせて理解しておくことは診療の基盤となる．しかし各疾患に特徴的な肉眼病理所見は剖検脳の肉眼観察時を除いては経験しづらい．本書はA4サイズで写真が大きく視認性がよいため，剖検脳を目の前で観察しているかのように追体験でき，不慣れであっても異常所見を確認することが容易である．認知症疾患の神経病理学的写真を提示する成書は複数刊行されているが，本書の写真の画質と視認性は特筆すべきである．

本書は2部構成である．第Ⅰ編　「中枢神経系の観察（正常）」では，脳の肉眼観察（通称「脳の切り出し」）の手順を解説し，正常な肉眼所見を示している．硬膜の外観，硬膜を除いた大脳表面のくも膜，くも膜顆粒・くも膜・柔膜の構造を見る．第Ⅱ編　「病変（疾患）の見方」が各論である．9章に分けて74疾患（病態）が図示されている．精神科診療に関連する項目の一部を以下に挙げる．

循環障害では，くも膜下出血，心停止後脳症，急性・陳旧性脳梗塞，ラクナ梗塞，動脈硬化，動脈瘤である．感染症ではヘルペス脳炎とエイズ白質脳症が掲載されている．変性疾患では，アルツハイマー病，ピック病，進行性核上性麻痺，皮質基底核変性症，多系統萎縮症，特発性パーキンソン病，レビー小体型認知症，歯状核赤核淡蒼球ルイ体萎縮症，ハンチントン病などである．その他には，ウェルニッケ脳症，多発性硬化症，マルキアファーバ・ビニャミ病，孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病，脳挫傷，びまん性軸索損傷などが記載されている．

本書のアルツハイマー病の項では，前頭葉の萎縮，側脳室下角の拡大，海馬・海馬傍回などの萎縮と，萎縮部の大脳皮質の幅の減少が明確に示される．特発性パーキンソン病では，中脳黒質と橋青斑核の黒色調の脱色が明瞭である．中大脳動脈領域の陳旧性脳梗塞や大脳の出血性梗塞および基底核のラクナ梗塞などのcommon diseaseでは，臨床例の脳画像を見ながら本書の写真を概観することで病変の質の理解が深まると考えられる．また剖検例が少ないウェルニッケ脳症とマルキアファーバ・ビニャミ病などの臨床教育において重要な画像が含まれている．

著者の新井信隆博士は神経病理学者であり，旧東京都神経科学総合研究所の臨床神経病理研究部門部門長であった．旧東京都立府中病院，都立府中療育センター，東京都立神経病院をはじめとする関連医療機関の脳の肉眼写真が中心となっている．著者は現在は東京都医学総合研究所・神経病理解析室長で「脳神経病理データベース」を管理している．神経病理の教育・普及活動の一環として本書が刊行された．

（有馬邦正）